
第2章

2015年大統領選挙

——ラージャパクサ敗退——

内戦終結後のスリランカでは、マヒンダ・ラージャパクサ大統領とその一族による権威主義的な支配が確立しつつあった。この体制を揺るがす野党勢力はみられず、ラージャパクサ一族によるスリランカ政治支配が続くかと思われた。

しかし、2014年9月のウヴァ州評議会選挙以降、反ラージャパクサ陣営の動きが活発になった。そこでラージャパクサは早期大統領選挙に打って出た。ラージャパクサの三選は确实視されていたが、与党SLFP幹事長だったマイトリパーラ・シリセーナが突如離反し、野党共通候補として立候補することとなった。

本章では、盤石とみられていたラージャパクサ体制はなぜ、どのようにして崩壊するに至ったのかを解説する。ラージャパクサ体制は一族とその取り巻きに強力な権限を与えることによって成立しており、彼らに対する反発は野党からだけでなく与党内部でも強まっていた。それまでは野党間および野党内で対立があり、強大なラージャパクサに対抗するには力不足だった。しかし大統領選挙に際し、ラージャパクサの三選阻止で一致した。三選が実現すれば、スリランカの民主主義は完全に崩壊するとの危機感⁽¹⁾があったからである。

大統領選挙戦でラージャパクサ陣営は内戦終結の功績および経済発展を全面に訴え、大がかりなキャンペーンを打った。一方、シリセーナ陣営の選挙キャンペーンは地味ではあったが、ラージャパクサ政権の汚職や腐敗、偏った外交政策などを批判し、その是非を国民に問うた。

2015年1月大統領選挙の結果は約45万票の差をつけてシリセーナが勝利した。外相に就任したマンガラ・サマラウィーラは、「スリランカのすべての民族、宗教、階層、カースト、信条の持ち主が銃弾や投石ではなく投票を用いて、

縁故主義、汚職、抑圧に対抗しようとする断固たる態度で虹の革命（Rainbow Revolution）に団結した」⁽²⁾と述べたように、民主的な手続きの勝利であり、スリランカ国民がそれを望んだとしている。

1. 9月州評議会選挙での与党不調

2014年9月のウヴァ州選挙は、大統領選挙実施前の最後の州評議会選挙であり、大統領選挙の前哨戦としての位置づけがあった。そのため、UPFAは周到に準備し、選挙キャンペーンに総力をつぎ込んだ。ウヴァ州はモナラガラ県とバドゥッラ県で構成される。バドゥッラ県の人口はモナラガラ県の1.8倍である。にもかかわらず、政府は今回の選挙前にバドゥッラ県の議員定数を3減、モナラガラ県の議員定数を3増とした。モナラガラ県が堅固なUPFA支持基盤だからである。この変更により州評議会議員1人当たりの有権者数はバドゥッラ県が3万3887人に対して、モナラガラ県では2万3769人と歪みが生じた⁽³⁾。ラージャパクサ自らも、安倍首相来訪（2014年9月7～8日）や習近平国家主席来訪（2014年9月16～17日）のためにコロomboに戻った以外は現地に張り付いた。公務員、サムルディ開発行政官、地方議員および公務員に採用されたばかりの大学生などを選挙キャンペーンに動員した⁽⁴⁾。そのため、選挙区のホテルや宿は予約で埋まり、野党陣営は宿を確保することができなかった。各省庁の公用車なども利用されたと、選挙管理委員会が指摘した。

9月20日に行われた選挙の結果は、UPFAが議席の過半数を確保したものの、25議席から19議席へ減少させ、UNPが7議席から13議席へ躍進した。バドゥッラ県ではUPFAが過半数を割る地区もあった。国会議員をあえて辞職して主席大臣候補として立候補した若手のハリン・フェルナンド（Harin Fernando）の存在もUNP票の拡大につながった⁽⁵⁾。2009年の同州の州評議会選挙や2014年3月の西部および南部州選挙が65%ほどの投票率だったのに対して、2014年のウヴァ州では72%を超えた。それだけ関心が高かったといえるだろう。本来UPFAが強いとされる農村部が多いうえに、総力戦で挑んだ選挙で得票が伸び悩んだことは、与党・大統領にとって打撃となった。

UPFAのスシル・プレマジャヤンタ（Susil Premajayantha）国会議員は、得票低迷の原因のひとつに若手や新人の擁立に失敗したことを挙げるほか、前回

(2009年8月)の選挙時は内戦直後の高揚感があったことを指摘して、単純に比較できないとした⁽⁶⁾。

2. 大統領選挙実施に至るまで

UPFAはウヴァ州選挙で過半数を確保したものの、その議席数は前回を下回った。他方、内戦終結以来のすべての選挙で敗北していたUNPは、ウヴァ州選挙の結果に久々に沸いた。

UNPは、この流れに乗って反政府運動の機運を高めようと党内改革の議論も活発になった。サジット・プレマダーサら改革支持派と党首のラニル・ウィクレマシンハとは党の方針をめぐる対立していたが、幹事長のティッサ・アタナーヤカ(Tissa Attanayake)らの調整が実り、プレマダーサを副党首に任命しプレマダーサもそれを受け入れることで党内の合意は形成されたかにみえた。

これまでの地方選挙で勝ち続けてきたラージャパクサにとってウヴァ州評議会選挙の結果は、小さな失点のようにみえた。しかしラージャパクサは、ウヴァ州評議会選挙の結果を軽視しなかった。

大統領の任期は6年であるが、憲法では就任後4年を過ぎれば選挙を行うことができた。2010年1月に選挙を行い同年11月に就任宣言を行ったラージャパクサの大統領としての任期は2014年11月で4年となる。そのため国内メディアは3月末から大統領選挙が近いのではないかと報道し始めていた。

各党も野党候補の顔ぶれのほか、大統領制度廃止、権限委譲、選挙改革などの憲法改正についてそれぞれ意見を述べている。

政党外の運動としてはラージャパクサ政権の権威主義や一族支配に対して僧侶のソービタ師らが「社会正義のための国民運動」を結成し、憲法改正について議論を重ね、これに野党勢力が集結する兆しがあった。

9月のウヴァ州評議会選挙で票を減らしたことで、野党勢力の集結の兆しを察知したラージャパクサは、2年前倒しでの選挙に打って出ることにした。第1章で述べたように、ラージャパクサ政権下では州評議会選挙と与党の都合のよい時期に行っていた。大統領選挙についても同様に与党にとって適切な時期を選ぶことができた。

大統領選挙には元最高裁長官であるサラット・N・シルバ (Sarath N. Silva) が「三選禁止条項を廃止した第 18 次憲法改正は、現大統領が 2 期目に選出された後に成立した。そのため現大統領には適用されない」と主張したため、ラージャパクサは最高裁に問い合わせた。最高裁が法的障害はないと 11 月 11 日に回答したのを受けて、大統領は 11 月 20 日に選挙実施を宣言した。この時点でラージャパクサの三選は確実視されていた。UPFAはこれまでの選挙同様にもてる資源とエネルギーをすべてつぎ込んでくると予測された。立候補受付は 12 月 8 日、投票は 1 月 8 日となった。

3. 野党の動き

ラージャパクサ陣営が三選にむけて着々と準備を進めたのに対して、野党勢力は第 19 次憲法改正を行って執行大統領制度を廃止することで一致しており、最高裁の判断が出された翌日にはコロomboの中心部ハイパークで大規模集会を開催した。しかし、野党共通候補者を選ぶか、各党の独自の候補者を擁立するかといった基本的なことに關しては、選挙の実施宣言の時点で明らかになっていなかった。UNPのウィクレマシンハやサジット、カル・ジャヤスーリヤ、民主党 (DP) のサラット・フォンセーカなど有力な人物の名前が浮かんだものの、どの人物への反対も相応に強く、野党勢力の分裂を招く懸念があったからである。とくにUNP内部の対立は深刻であった。

たとえば、ウィクレマシンハは選挙に負け続けていること、それに対する責任をとっていないことが内部で批判された。ウィクレマシンハが出馬しないなら副党首の地位にあるのはブレマダーサであったが、これにはマンガラ・サマラウィーラなどが批判的であった。サマラウィーラはUNPのメディア担当者として重要なポジションにあり、党内で将来を嘱望されていたし、本人も当然期待していた。しかし、ここでブレマダーサとアタナーヤカがウィクレマシンハに代わり要職に就くことになると、サマラウィーラの党内での地位が危うくなる。そのためサマラウィーラは 2007 年に離党したUPFAへの復帰をほめかしていた。UPFAからの接触もあったようだ。UNP党内でも将来をどちらに託すかで意見が割れていたが、サマラウィーラをUNPに引き留めようとするグループが押し切ったようだ。

カル・ジャヤスーリヤを選出することも、反対が予想された。野党連合を組むことになるフォンセーカもカル・ジャヤスーリヤには反対だった。

UNPは、2010年の大統領選挙において野党共通候補としてフォンセーカを支持しており、大統領選挙で2回続けて党外から共通候補を出すのではなく、自党から候補者を擁立したかった。しかし、ラージャパクサに対抗でき、かつ党内の分裂も回避できる選択肢として、党外から共通候補を模索することになった。

最終的にSLFPのベテランであるシリセーナが共通候補に擁立されたのは、共通候補を見いだすことができない野党勢力を結集して、ラージャパクサの三選をなんとしても阻止しなければならない、という前大統領のチャンドリカ・バンダーラナイケ・クマーラトゥンガ（1994年11月就任～2005年11月）の働きかけがあったからである。この機を逃すと、通常ならば6年、悪くすると8年間ラージャパクサ政権が継続することになるという危機感があった⁽⁷⁾。そのあいだにラージャパクサは野党の弱体化や分裂に乗じて、さらに大統領の権限を強化し、民主主義を形骸化させるにちがいがなかった。

そこで、クマーラトゥンガは手詰まり状態の野党からではなく与党からの候補者擁立という手に打って出た。クマーラトゥンガには、スリランカの政治危機を救うという目的のほかに、「ラージャパクサー族によって破壊されたSLFPを立て直す」⁽⁸⁾という意識もあったようだ。与党内にはラージャパクサの政治方針に反対するも無視され、一族支配によって上級大臣など閑職に追いやられて不満を抱いていたベテランメンバーらがいた。古参議員の多くはクマーラトゥンガが首相・大統領をつとめた時期に、ともに働いた経験がある。そのなかからシリセーナが擁立され、現職の大臣・副大臣、地方議会の要人らもシリセーナとともに反旗を翻したのだった。シリセーナの立候補をUNPほかの政党が認め、シリセーナを野党共通候補とすることで合意が得られた。

4. シリセーナの離反

メディアはシリセーナの動向を注目した。11月12日にはSLFP本部での記者会見でシリセーナは大統領選への出馬に関しての質問に対して、野党の共通候補として大統領選挙に立候補するという噂を否定した⁽⁹⁾。別のインタビュー

表 2－1 シリセーナ支持を表明したUPFA議員ら（2014 年）

Rajitha Senarathne	漁業大臣 1950 年生，カルタラ県選出，2007 年 1 月 UNP から SLFP にクロスオーバー
Duminda Dissanayake	教育サービス大臣，1979 年生，アスラーダプラ県選出，二世議員
M.K.D.S. Gunawarudana	仏教振興副大臣，1947 年生，トリンコマリ県選出
Rajiva Wijesinghe	1954 年生，ナショナル・リスト，学者から転向
Arjuna Ranatunga	1963 年生，元クリケット・ナショナルチームのキャプテン
Perumal Rajadurai	1967 年生，ヌワラ・エリア県選出
Wasantha Senanayake	1973 年生，ガンパハ県選出，二世議員でもともと UNP 所属

（出所）筆者作成。

ー⁽¹⁰⁾ では、笑って明確な返答を避けた。ラージャパクサによる選挙実施宣言（11 月 20 日）の前日に SLFP の中央委員会が開催され、ラージャパクサが大統領候補として発議され賛同を得たが、通常ならばあるはずのシリセーナ幹事長の署名がなかった。20 日の午前中には、参加したイベントでシリセーナは「これが国家への最後のサービス」と述べた。

ラージャパクサにとって党首を務める SLFP からの立候補声明（21 日午後）は青天の霹靂だった。立候補したマイトリパーラ・シリセーナは現役の幹事長、すなわち名目上は SLFP のナンバー 2 であり、保健大臣であった。シリセーナは 1951 年に農民の子として生まれ、ポロンナルワで育った。1969 年に SLFP へ入党したものの、1971 年の JVP 反乱時に JVP 党員の疑いをかけられ、2 年半獄中にあった。1989 年より国会議員となり、2001 年から党の幹事長を務めている。

21 日午後、クマーラトゥンガやクロスオーバーを表明した議員ら（表 2－1）も出席するなか新タウンホールで行われた立候補声明でシリセーナは、時折涙を浮かべながら、立候補を決意した背景を語った。

要約すると、「自分は 47 年間 SLFP 党員であり、13 年間幹事長であった。SLFP はこの国のために多大な貢献をしてきた。しかし SLFP 政権は、内戦終結後、われわれが期待するのとちがう方向に進み始めた。第 18 次憲法改正は、深刻な過ちである。人々から自由、民主的権利を奪い、国会の権限を奪った。

1978年の執行大統領制をさらに強めてしまった。

報道の自由がない状況で、選挙制度が腐敗している。さらにスリランカの国際的なイメージが破壊されてしまった。現政権下で汚職、不正行為、不正義がまかり通っており、司法は崩壊し、警察は弱体化した。社会経済・政治システム全体が一家族に乗っ取られている。この国は、汚職と権力の濫用にまみれ、破壊された。この一族によって、自分も多大な苦杯をなめた。

これらの問題の解決策を探さなくてはならない。SLFPとUNPは、この国で変えなくてはならない点について共通の合意に至った。クマーラトゥンガとUNP党首ウィクレマシンハに感謝しなければならない。UNPは、大きな犠牲を払ってSLFPの幹事長を共通候補に選んだ。

SLFPの幹事長として、自分が共通候補に選ばれるとは予想していなかった。保健大臣として4年間過ごしたが、思い通りには遂行できなかった。人間誰でもいつか死ぬ。しかし、その前になにか人のためにしなければならない。そのために私はすべての地位や特権を諦めて、大統領制を廃止するという決意に至った。

大統領就任後100日間で執行大統領制を廃止し、第17次改正憲法を復活させ（独立した公安、選挙管理、行政、司法委員会など）法の支配を回復する。首相にはウィクレマシンハを任命する。」

また、政府批判をするものへの暴力や縁故主義および汚職がはびこり、経済格差が生じているとの認識が以下のような発言から見て取れる。「この決断を下したことで、自分のイメージに泥を塗るようなことがなされるだろうし、殺人まであるかもしれない。執行大統領制のもとで一部の者が億万長者になっているのに対して、平均的なスリランカ人は、多大な苦勞を強いられている。新政府の最重要課題は、こうした（平均的な）声なき人々の生活水準を引き上げることである。執行大統領制下では、ごろつき、犯罪者、薬の売人がはびこり、縁故主義と汚職が制度化されてしまっていた。しかし、ラージャパクサは対処しなかった。」⁽¹¹⁾

同席したクマーラトゥンガは2005年に大統領の座を退いて以来9年ぶりとなる政治の表舞台への復帰となったが、ラージャパクサ打倒のための連合においていかなる地位にも就かないと宣言した⁽¹²⁾。

5. ラージャパクサの困惑

シリセーナはラージャパクサの対立候補として弱いの懸念があった。カリスマ的な指導者であるラージャパクサと比較すると、控えめで穏やかな物腰もそのような見方を助長した。党内の立ち位置に関しても、2014年8月にはUNP国会議員がシリセーナはSLFP内部でもクマーラトゥングا寄りで主流派ではないと発言していた⁽¹³⁾。

ラージャパクサはすぐさまシリセーナおよび離反議員をSLFPから除名したものの、ラージャパクサは大きく動揺し、ラージャパクサや大臣らの失言も相次いだ。ラージャパクサは、11月23日に離反者らの「ファイル」をもっている（不正行為を記録したファイルを公開する）と離反者を脅すような発言をした⁽¹⁴⁾。11月25日にマヒンダ・アマラウィーラ（Mahinda Amaraweera）災害管理大臣は、「現政権の大臣らはもう十分収奪した」（筆者補足：これ以上収奪しようとは思わないから政権交代しない方が国民にとってよい）と発言し失笑を買った⁽¹⁵⁾。

また、ラージャパクサは12月11日の選挙キャンペーン開始前日に、インド・アーンドラプラデシュ州のティルパティ寺院を訪れた⁽¹⁶⁾。願えばどんな願いでも叶うとされるヒンドゥー教カーリー女神の寺院である。人生の岐路には宗教行事を行うのが一般的なスリランカ人にとっても、ラージャパクサの行為は過剰に映った。無風が予想されていたが、一転することとなる大統領選挙に対する、ラージャパクサの危機感や焦燥感がうかがえた。

〔ラージャパクサのクマーラトゥングア・アレルギー〕

ラージャパクサの危機感・焦りは、シリセーナ擁立の立役者となったのがクマーラトゥングアであった点にもある。ラージャパクサは、2005年にクマーラトゥングアの後を継いで大統領候補となったものの、クマーラトゥングアに対して苦手意識がある⁽¹⁷⁾。2005年選挙でウィクレマシンハに勝利し、大統領に就任した後の、前任者のクマーラトゥングアに対する対応は冷淡だったとされている⁽¹⁸⁾。2007年にアヌラ・バンダーラナイケやマンガラ・サマラウィーラを大臣職から罷免したのも、彼らがクマーラトゥングアに近いという理由だったから

とみられている。したがって、ラージャパクサはクマーラトゥンガから恨まれていると感じており、今回のクマーラトゥンガの政治舞台への復帰を自分への復讐ととらえたのである。そのような背景から、ラージャパクサは「1月8日の選挙における真の敵はクマーラトゥンガである」⁽¹⁹⁾と述べたと考えられる。

6. 市民社会の支援

12月1日、野党勢力と「社会正義のための国民運動」をはじめとする市民団体が「公正で民主的、人民フレンドリーなガバナンスのための一般人の行動計画」⁽²⁰⁾に署名した⁽²¹⁾。その内容は、100日以内の執行大統領制度廃止、議院内閣制の導入、独立委員会の復活、選挙制度の改正、給与引き上げ、国内経済活性化、福祉見直し、汚職・不正行為撲滅、法の支配の徹底、教育・保健重視、若者世代のエンパワメントなどを含む。

労働組合、人権グループ、芸術家・文化人、大学職員らの運動をまとめ、市民社会の運動を牽引したのが、仏僧のソービタ（Maduluwawe Sobitha）師である。政治家となり国政に参加する僧侶⁽²²⁾がいるなか、ソービタ師はあくまで僧侶の立場からの運動を貫いた。これまでいかなる政党にも属しておらず、汚職や腐敗にも縁遠く、国民の信頼も厚い。

JVPやJHUは署名には参加していないが、JHUは12月はじめにシリセーナ支持を表明し、JVPのビジタ・ヘーラット（Vijitha Herath）議員は、ラージャパクサ以外に投票するべき、というのがJVPのメッセージであると語った⁽²³⁾。

7. 選挙キャンペーン

立候補届は2014年12月8日に行われ、ラージャパクサ、シリセーナを含む19人が届出を行った。シリセーナは国民民主戦線（NDF）から出馬し、シンボルは白鳥となった。同党からは2010年の大統領選挙で、フォンセーカが野党共通候補として出馬したことがある。選挙集会は、シリセーナが11月30日にボロンナルワから、ラージャパクサが12月11日にアヌラダブラから開始したが、その前から集会以外の動きが始まった。

〔ラージャパクサ陣営の選挙キャンペーン〕

ラージャパクサ陣営は、内戦終結時の様子を放映するなど、内戦終結の功績、国際社会から戦争の英雄を守っていると愛国主義を強調した。また、シリア、リビア、エジプトのようなアラブの春の失敗を引いて、安定した現政権の優位性をアピールした。

ラージャパクサ陣営は、これまでの選挙戦同様、与党であることを最大限に活かした、大規模な人気取り政策を展開した。たとえば物価の引き下げや2015年度予算での公務員の給与引き上げなどばらまきを行った。2015年1月5日、政府は、原油価格の下落を受けて、ガソリンと軽油価格を1リットル・7ルピー、またケロシン油（灯油）価格を1リットル・5ルピー引き下げた。また7日から、12.5キロ入りのプロパンガス・ボンベの価格を250ルピー⁽²⁴⁾、5キロ入りのプロパンガス・ボンベの価格を100ルピー引き下げた。LTTEに没収されていた貴金属・宝石、銀行預金などの返却イベント、カンカサントライ（KKS）＝ジャフナ間鉄道開通式などの北部対策も選挙運動に組み込んだ。

政府はムスリム向けの政策も打ち出した。たとえば2014年11月以降、メッカ巡礼を支援したり、選挙運動中にモスクを訪問したり、2014年6月の襲撃で被害を受けたダルガタウンやアルトゥガマ修復に特別タスクフォース（STF）要員600人を派遣した。

キャンペーンではドローンカメラなども駆使され、会場にはラージャパクサがプリントされた青い風船がそこかしこに配置され、集会に参加する人々を運ぶためのバスが大量に動員された。集会参加者にはおそろいのTシャツやキャップが配られた。全国各地の選挙運動に飛び回る党幹部はヘリコプターで移動した。

多額の広告料を支払い、テレビ広告も打った。ソーシャルメディア戦略は、インド人民党（BJP）のIT専門家が指揮を執っていたのではないかとインド英字紙の『ヒンドゥー』は推測した。また、ラトナプラの若者向けの集会にホログラム・スピーチを行った⁽²⁵⁾が、これはインドのモディ首相を真似たものとみられた。

〔シリセーナ陣営の選挙キャンペーン〕

シリセーナの選挙キャンペーンは2014年11月30日にポロンナルワから始

まった。シリセーナには、ラージャパクサのもつカリスマ性はないものの、誠実で温和、平和的というイメージがあった。ラージャパクサの個人批判をしないと明言しており⁽²⁶⁾、2010年の大統領選挙でラージャパクサの対立候補だったサラット・フォンセカが攻撃的だったのとも対照的であった。

シリセーナは、UPFA時代は、汚職について語ることを止められていたと明らかにし⁽²⁷⁾、保健大臣時のガソリン購入券を返上するなどして⁽²⁸⁾、透明性と清潔さをアピールするなどクリーンさを打ち出し、ラージャパクサ政権の腐敗・汚職を徹底して追及した。

汚職・腐敗については、おもにラージャパクサー族と取り巻きらが私腹を肥やしていることに焦点を当てた。その原資となっていたのは開発プロジェクトで、JUHの幹事長チャンピカ・ラナヴァカ（Patali Champika Ranawaka）が汚職追及の急先鋒であった。ラナヴァカは12月15日に発刊となったシンハラ語の自書「Alapalu Arthikaya」（英語訳：The Boom Doom Economy- Mega Deals or Innovations?）で「ノロッチョライ石炭火力発電所は2005年には300メガワット3億ドルのプロジェクトと見積もられていたが、2006年には4億5500万ドルに跳ね上がった」「南部高速道路の建設コストが開始時は1キロメートル当たり250万ドルだったのが、完成時には4500万ドルになっていた」などと大規模インフラプロジェクトに関して会計上疑惑があると記した⁽²⁹⁾。

さらにウィクレマシンハは12月16日に、中国の直接投資となるコロンボ・ポートシティ（CPC）プロジェクトについて、政権に就いたら廃止すると述べた⁽³⁰⁾。

ラージャパクサ陣営がきらびやかで大規模な集会を開催するなか、シリセーナ陣営にとっては集会開催場所を探すのさえ困難な状態であった。各自治体がラージャパクサ政権に気兼ねして集会施設の貸与を断ったからである。テレビ広告を放送しようとしても、資金面で強いラージャパクサ陣営に放映権を買われてしまうことがたびたびあった。

このように、選挙運動の見た目や規模は大きく異なったが、それはかえってラージャパクサ陣営がいかに資金をかけているか、その資金がもしかしたら、開発や福祉に使われるはずだった外国からの資金や国民の税金だったかもしれない、つまり汚職や不正行為を有権者に連想させるのに十分だった。これに対しシリセーナはキャンペーン中、政治的報復あるいは政治的な魔女狩りをやめ

ると語っていた⁽³¹⁾。

野党連合はラージャパクサを倒すという唯一の目的に、各党（UNP, JVP, JHU）が集結（「グッドガバナンスと変化」というスローガン）した。本来なら、UNPとJVPは相容れない多様な政党の寄せ集めであったが、農村部における活動に弱いUNPをJVPが補うなどの思わぬ相互作用がみられた。この点は2010年の大統領選挙とは異なった。共通野党のなかでは指導権をめぐるクマーラトゥンガ、ウィクレマシンハ間の対立が生じるのではないかとする危惧があったがクマーラトゥンガは表に出過ぎることはなかった。

〔公約〕

12月19日に発表されたシリセーナの選挙公約は以下のとおりである。

- 1) 政治制度改革：憲法改正（執行大統領制度の廃止，大臣数削減，選挙暴力を助長する選好票（PV）廃止等の選挙制度改革，司法，警察，選挙，会計などの独立委員会の権限強化）。
- 2) 経済開発：メガプロジェクトを見直し，汚職と無駄をなくす。国家経済計画委員会の設立，プロジェクトの優先順位設定。サムルディ補助金引き上げ，公務員給与引き上げ。
- 3) 道徳的な社会：危険な薬品の流入阻止。文化・宗教振興。
- 4) 食料安全保障：危険な農薬輸入の即時停止，生物多様性保護，外国企業への土地移転を一時中止，北部での灌漑開発，農産物買い取り価格安定など。
- 5) ヘルスケア：保健医療予算引き上げ。出産手当，伝統医療手当，薬価引き下げ。
- 6) 教育：教育関連予算引き上げ。奨学金引き上げ。国立大学増設など。
- 7) 国際関係：外交官などの政治的任用廃止。インド，中国，パキスタン，日本と均等な関係の構築，タイ，インドネシア，韓国などアジア新興国と関係改善。対インド政策の変更。反インドでも依存でもない親密な関係の実現。
- 8) 産業政策：中小企業の活動助成，輸出多様化促進，輸入代替促進，青年層の失業対策，海外労働者の年金整備など。
- 9) 公共サービス：長期・正規雇用の拡大。サラット・フォンセーカ元陸軍

司令官、シラーニ・バンダラナイケ前最高裁判所長官の復権など。

- 10) エネルギー政策：化石燃料にかかる補助金削減，再生可能エネルギーへの転換。
- 11) メディアの自由：国会中継を復活など。

ラージャパクサの選挙公約は、不在者投票（郵送投票）が始まってから発表されるなど、遅れた。「世界レベル実現への道」を掲げて、内戦を終えてインフラを整えた次の段階は、工業発展を含めた世界レベルの活躍・繁栄をめざすとした。憲法委員会を設立し、「法の支配」の徹底などを主張している。これまで経済政策としては大規模インフラ開発一辺倒だったものが、農民への土地の配分，海外で長く働いた労働者に車を安く買う権利を与える，帰国後の住宅建設補助，海外在住者への投票権の付与，デヴィ・ネグマ政策による農村生活の質の向上，大学入学者を現在の約2万人から10万人に増やす，などターゲットを明確にしたばらまきの政策が打ち出された。また，LTTE残党による脅威があるとして，内戦時の人権侵害疑惑に関して，国際法廷や国際調査を受け入れないとした。

シリセーナの公約では，各国との均等な関係や，インドの関係強化について直接の言及はあったものの，中国政策については触れていなかった。しかし，選挙キャンペーンで，論争となったのはラージャパクサ政権の中国依存であった。ウイクレマシンハは，政権についたならば，コロンボ・ポートシティ（CPC）プロジェクトを中止すると述べた。

〔クロスオーバー〕

11月下旬にヴァヴニヤ県選出の全セイロン・マッカル会議（All Ceylon Makkal Congress: APMC）のフナイス・ファルーク（Hunais Farook, 1年生議員だが教育のあるムスリムといわれている）のクロスオーバーで，与党は国会の3分の2の議席を僅か2議席上回るのみとなった。

12月1日にはナヴィン・ディサナーヤカ（Navin Dissanayake）経営改革大臣がクロスオーバーを表明した。12月2日にはJHUの野党候補支持表明があった。主要メンバーであるラナヴァカとガマンピラ（Udaya Gammanpila）はシリセーナの離脱前にすでにそれぞれ大臣職と西部州評議委員を辞任（11月18

日)した。しかし、ガマンピラは12月11日にラージャパクサ支持に転向した。12月8日、ヒルニカ・プレマチャンドラ(Hirunika Premachandra)西部州評議会議員もシリセーナ支持を表明した。2011年に選好票をめぐり父親であるパーラタ・ラクシマン・プレマチャンドラ大統領顧問がドゥミンダ・シルヴァ議員に殺害された件について、処罰がなされていないことに不満を述べた。12月10日、P. ディガンバラム(P. Digambaran)国民言語・社会統合大臣とV.S. ラダクリシュナン(V.S. Radhakrishnan)植物園・公共リクリエーション大臣はともにシリセーナ支持を表明した。彼らは高地出身のタミル人であり、同時に州評議会議員3人、村議会議員14人もシリセーナ支持を表明した。12月22日にはリシャード・バディユディーン(Rishad Bathiudeen)工業・商業大臣(ACMC党首)がシリセーナ支持を表明した。バディユディーンは2004年からUPFAメンバーで東部州とマナー県に票田がある。地方議員69人、州評議会議員7人もバディユディーンに賛同した。12月25日にはCWC副党首のウダヤクマール(M. Udayakumar)、28日にはラウフ・ハキーム(Rauff Hakeem)法務大臣(SLMC党首)、パッシャー・セグダーウッド(Basheer Segudawood)生産性向上大臣、31日にはファイザル・ムスタファ(Faiszer Musthapha)投資促進(ラージャパクサとゴーターバヤ国防次官と近いとされていた)とタミル人・ムスリム議員のクロスオーバーが相次いだ。1月に入って、ナンディミトラ・エカナヤケ(Nandimithra Ekanayake)⁽³²⁾がシリセーナ支持を表明した。前観光大臣で国会議員のスランガ・ジャゴダ(Achala Suranga Jagoda)もシリセーナ支持を表明した。そのほか地方議員の多くもシリセーナ支持を表明している。

ラージャパクサ陣営へのクロスオーバーとしては、先述したJHUのガマンピラ、ジャヤンタ・ケタゴダ(Jayantha Ketagoda)NDA議員、そして12月8日、UNPの幹事長ティッサ・アタナーヤカである。アタナーヤカのクロスオーバーは、シリセーナの立候補直後から噂されていたものの、本人は否定し続けていた。アタナーヤカはクロスオーバーに際してウィクレマシンハに宛てた書簡で、党の前議長マリク・サマラヴィックレマ(Malik Samarawickrama)や、ラヴィ・カルナナヤケ、マンガラ・サマラウィーラが徒党を組んでウィクレマシンハとサジット・プレマダーサの和解を阻んでいると批判している。

ただ、アタナーヤカの党籍替えによって双方の得票数は大きく変化しないと

見込まれた。なぜなら、アタナーヤカは比例区から選出されており、出身の選挙区での影響力は大きくない。UNPにとって得票数よりも打撃だったのは、アタナーヤカがUNPの幹事長であり、選挙の全国・オーガナイザーをつとめていた点である。オーガナイザーは、各県および全国の立候補者や選挙キャンペーン全体をとりまとめる要（かなめ）である。UNPにとって、選挙キャンペーン中の幹事長の辞任と党籍替えは選挙キャンペーンの実施に影響を及ぼさざるを得なかった。また、シリセーナ幹事長の突然の離反に慌てたUPFA側にとっては、アタナーヤカがUNP内部の不統一をさらけ出した形となり、一矢報いたかたちとなった。アタナーヤカはシリセーナが就いていた保健大臣に任命された。

しかし、党首のウィクレマシンハは、かつてマンガラ・サマラウィーラを熱心に引き留めたように、アタナーヤカを引き留めることはなかった。またアタナーヤカの党籍替えは、UNPにさざ波を起こしたものの、アタナーヤカの後に続いてUNPからクロスオーバーする議員は出なかった。

大統領選挙への影響が少なかつただけでなく、その後のスキャンダルは、アタナーヤカのこれまでの政治キャリアを台無しにした。アタナーヤカは12月22日にウィクレマシンハとシリセーナのあいだで交わされたとされる密約を暴露したが、その署名が偽物だったからである。アタナーヤカは、ウィクレマシンハとシリセーナが11月1日付けの秘密の合意文書を作成しており、それによれば北部の私有地を含む高度警戒地区（HSZ）を解除、元の所有者への返還、第13次憲法改正を上回る権限委譲実施、戦争犯罪と人権侵害に関して国連人権理事会（UNHRC）がスリランカに勧告したすべての項目を実施、などが記されており、在外タミル人の歓心を得てタミル票を獲得しようとするものであるとアタナーヤカは主張した。またシリセーナ陣営が国防費を40%削減し、北部に配置された軍兵士の半減を実施するとしていることが国内安全保障上問題であると批判した。ところがその両者の署名は偽物だったとして、アタナーヤカは2015年2月2日に逮捕され、2月11日に証拠不十分で保釈された。

「暴露」会見の数日前に発表されたシリセーナのマニフェストには、民族問題の政治的解決に関する項目は含まれていない。そのため、このような偽造文書を発表することで、ラージャパクサ陣営はシリセーナ陣営に打撃を与えられと踏んでいたのだろう。タミル人を優遇するような政策や内戦を終結させた

軍や兵士を軽んじる政策は多数派のシンハラ人から拒絶される、と期待したと思われる。

〔ムスリム・タミル政党の動き〕

与党を構成するムスリム政党やタミル政党は大統領選挙に際して難しい判断を迫られた。ムスリムが多数を占める財界としてはこれまで培ってきた政界との関係を維持したかったことから、ラージャパクサ支持が表明されることもあった。しかし、2014年6月のダルガタウンおよびアルトゥガマの暴動でムスリムらの、ラージャパクサ政権に対する不信任は決定的となった。2014年9月のウヴァ州評議会の選挙でも獲得できたムスリム票はわずかだったとされる⁽³³⁾。

ムスリム政党にとって、どちらを支援すれば、ムスリム政党の分裂を避けつつムスリムにとっての利益を最大化できるかを見極めねばならなかった。政府もムスリム政党にポトゥヴィル（Pottuvil）の軍キャンプ撤退やオルヴィル港（Olivil Harbour）建設で土地を失ったムスリムへの補償などをもちかけて支持を求めている⁽³⁴⁾。

しかし11月下旬に東部州の州評議会議員3人がUPFAから離脱し、加えて12月22日には全セイロン・マッカル会議（ACMC）党首で産業・商業大臣バディユディーンが大臣職を辞任しシリセーナ支持を表明した。さらに12月12日に国会議員に任命されたばかりのアミール・アリ（Ameer Ali——ナショナル・リスト、UPFA）および69人の地方議会議員や州評議会議員7人もシリセーナ支持を表明するなどラージャパクサ離れが相次いだ。

タミル票の動向について、ラージャパクサは、インドのテレビ局のインタビューに答えて、2005年の大統領選挙の時よりも北部のタミルの票、とくに若者の票を得られるだろうと自信を示した。高地タミルの得票に関しては、シリセーナ陣営へのクロスオーバーが相次いだが、CWCのアルムガム・トンダマン（Arumugam Thondaman）がUPFAに残っていることから支持は堅いと期待していると語った⁽³⁵⁾。

一方、北部のタミル政党は、和解の進展や権限委譲が進まないことへの苛立ちがあった。TNAのリーダーのサンパンダン（R. Sampanthan）は、12月30日というぎりぎりの段階でシリセーナ支持を公にした。しかし、TNA首脳部

はウィクレマシンハヤクマーラトゥンガおよびシリセーナら野党連合と密接に連絡を取り合っており、かなり早い段階からシリセーナ支持を決めていて、タイミングを見計らった発表であった。

シリセーナ支持表明をぎりぎりまで遅らせたのは、TNAとの協力関係が、諸刃の剣となりかねないからである。タミル票が加わることはシリセーナ陣営にとってプラスだが、TNAと密約があるのではないかとシンハラ人有権者に不信感を抱かれると懸念されたからである。

〔選挙暴力、不正〕

今回の大統領選挙でも、選挙暴力や不正は散見された。とくに、ラージャパクサ陣営からシリセーナ陣営へのクロスオーバーが多発した2014年12月半ば以降に発生した。今回の選挙では、選挙暴力の加害者がUPFA関係者であった場合でも、時間をおかずに逮捕されている点がこれまでと異なる。たとえば12月17日南部州ゴール県ワンドゥランバで、シリセーナが演説を予定していた会場が何者かにより放火された。翌18日、警察は、UPFA議員でゴール県選出のニシャンタ・ムトゥヘッティガマ（Nishantha Muthuhettigama）小規模輸出作物促進副大臣の支持者3人を逮捕した。12月23日、コロンボ県コロンナワのシリセーナ陣営の集会場で発砲があった。UPFA所属の州評議会議員ドン・カマル・インディカ（Don Kamal Indika）が自首した。2015年1月4日にはラトナプラ県カハワッテのシリセーナ陣営の集会で発砲があり、3人が負傷、1人が死亡した。この件に関してはプレマラル・ジャヤセーカラ（Premalal Jayasekara）電力・エネルギー副大臣、サバラガムワ州評議会議員やカハワッタの村議会議員に逮捕状が出され、選挙後に逮捕された。

12月26日、カルタラ県ベルワラで夕食中のクマーラトゥンガとヒルニカ・プレマチャンドラに石が投げつけられた。シリセーナを支持する芸術家らがクルネーガラ県で運動中に襲撃された。

スキャンダルとしては、12月末、インドの映画スターのサルマン・カーンが、元ミス・スリランカのジャクリーン・フェルナンデスとともにスリランカを訪問し、ラージャパクサの青年向け保健イベントに参加した。これに対して、ラージャパクサ陣営がカーンに7億ルピー支払っていたことが暴露された⁽³⁶⁾。

国営メディアが、あからさまにラージャパクサ寄りの映像やシリセーナの人

格を否定するようなニュースを放送していた。さらに、選挙運動の終了後も特定の候補者の映像を流し続けたとして選挙管理委員長から注意を受けた⁽³⁷⁾。投票当日には国営ルーパバヒニ放送が、UNPの副党首のブレマダーサが鞍替えしたというニュースを流したが、これはねつ造だった⁽³⁸⁾。

さらにJHUのガマンピラや大臣らが地方議員を脅してラージャパクサ支持を強制しようとした⁽³⁹⁾。そのため、議会に出席できない・政治活動を行えないなどの弊害が生じた。

道路開発局（RDA）職員などが選挙キャンペーンに駆り出され⁽⁴⁰⁾、集会参加者のために国営バスも用いられた。国営メディアは選挙法で禁止されているにもかかわらず、ラージャパクサの集会を生放送した⁽⁴¹⁾。

さらに、ラージャパクサ陣営は、マイトリパーラ・シリセーナの得票を減らすことを目的としてシリセーナという名字の人物を立候補させたといわれている⁽⁴²⁾。ラージャパクサとその人物が投票所に仲良く並んで入った写真がツイッターで配信された⁽⁴³⁾。

8. 選挙結果

2015年1月8日投票当日のスーパーマーケットは水や食料を買い求める人々で混雑した。2010年の大統領選挙後の騒動⁽⁴⁴⁾が記憶に新しく、外出禁止令が発令されると危惧したからである。しかし、選挙管理委員長のマヒンダ・デーシャプリヤ（Mahinda Deshapriya）が会見で語ったように投票日には、ジャフナ県ポイントペドロやヴァヴニヤ県で爆発が発生したものだけが人はなかった。目立った暴力事件や、選挙違反も報告されていない。

結果はシリセーナ 621 万 7162 票（51.3%）、ラージャパクサ 576 万 8090 票（47.6%）、投票率 81.5%となった（表 2 - 2）。表 2 - 3 には県ごとの各候補者の得票率を示した。

内戦終結後間もない 2010 年の投票総数が 1049 万票だったのに対して、2015 年は 177 万票（16.9%）増えて 1226 万票となった。北部州での投票増加がこれに貢献している。ジャフナ県やヴァヴニヤ県では、有権者数がそれぞれ 26.6%、5.2%減少した。これは、他県への流出あるいは国外への流出したものと考えられる。その一方で帰還して定住が進んだ国内避難民が投票できるようになった。

表2-2 近年の大統領選挙・国会議員選挙の得票数

	投票率 (%)	UPFA (SLFP)	野党共通候補	UNP
2005年11月 大統領	73.7	ラージャパクサ 4,887,152		ウイクレマシンハ 4,706,366
2010年1月 大統領	74.5	ラージャパクサ 6,015,934	フォンセーカ 4,173,185	
2010年4月 国会議員 (議席数)	61.3	4,846,388 (144)		2,357,057 (60)
2015年1月 大統領	81.5	ラージャパクサ 5,768,090	シリセーナ 6,217,162	
2015年8月 国会議員 (議席数)	79.8	4,732,669 (95)		5,098,927 (106)

(出所) 第1章表1-1と同じ。Election Departmentより筆者作成。

そのため、ジャフナ県やヴァヴニヤ県では有権者数は減ったものの、投票数は無効票も含めるとそれぞれ89.4%、70.5%増となった。全体の投票率も74.5%だったのが81.5%へと高まった。

そして北部の投票数が増えたことがシリセーナとラージャパクサの勝敗の分かれ目となった。県毎の得票数をみると、それが明らかになる。

図2-1ではタミル人の多く居住する北部・東部州（バティカロア県、ディガマドゥッラ（アンパーラ）県、トリンコマリー県、ジャフナ県、ヴァヴニヤ県）とそれ以外の県の得票数をまとめた。それによればラージャパクサは北・東部以外では、2010年の大統領選挙では561万票を獲得していたのが今回は544万票と減りはしたが、シリセーナよりも20万票ほど多く得票している。しかし、北・東部の得票数はラージャパクサが32万3600票にたいしてシリセーナは97万8111票獲得しており、その差は65万票にもなった。これが二人の明暗を分けた。ラージャパクサの主たる敗因は、復興によって投票が可能になったタミル票を得ることができなかったことである。ラージャパクサは、2015年1月2日ジャフナで「よく知らない天使よりも、よく知っている悪魔に投票を」と呼びかけた⁽⁴⁵⁾が、タミル人らにはラージャパクサのメッセージは届か

表 2－3 2015 年 1 月大統領選挙，8 月総選挙県別結果

州	県	大統領選挙		総選挙		
		立候補者	得票率 (%)	政党	得票率 (%)	選挙区議席数
西部	コロンボ	ラージャバクサ	43.40%	UNP	53.00%	11
		シリセーナ	55.93%	UPFA	39.21%	7
				JVP	6.73%	1
	ガンパハ	ラージャバクサ	49.49%	UNP	47.13%	9
		シリセーナ	49.83%	UPFA	44.92%	8
				JVP	7.18%	1
	カルタラ	ラージャバクサ	52.65%	UPFA	48.56%	5
		シリセーナ	46.46%	UNP	44.47%	4
				JVP	5.52%	1
中央	キャンディ	ラージャバクサ	44.23%	UNP	55.57%	7
		シリセーナ	54.56%	UPFA	38.98%	5
	マータレー	ラージャバクサ	51.41%	UNP	49.84%	3
		シリセーナ	47.22%	UPFA	45.54%	2
	ヌワラエリア	ラージャバクサ	34.06%	UNP	59.01%	5
		シリセーナ	63.88%	UPFA	37.98%	3
南部	ゴール	ラージャバクサ	55.64%	UPFA	50.07%	6
		シリセーナ	43.37%	UNP	42.48%	4
	マータラ	ラージャバクサ	57.81%	UPFA	52.44%	5
		シリセーナ	41.24%	UNP	39.08%	3
	ハンバントタ	ラージャバクサ	63.02%	UPFA	53.84%	4
		シリセーナ	35.93%	UNP	35.65%	2
				JVP	9.98%	1
北部	ジャフナ	ラージャバクサ	21.85%	TNA	69.12%	5
		シリセーナ	74.42%	EPDP	10.07%	1
				UNP	6.67%	1
	ヴァヴニヤ	ラージャバクサ	19.07%	TNA	54.55%	4
		シリセーナ	78.47%	UNP	23.98%	1
				UPFA	12.72%	1
東部	パティカローア	ラージャバクサ	16.22%	TNA	53.25%	3
		シリセーナ	81.62%	SLMC	16.11%	1
				UNP	13.55%	1
	ディガマドゥッラ	ラージャバクサ	33.82%	UNP	46.30%	4
		シリセーナ	65.22%	UPFA	27.39%	2
				TNA	13.92%	1

	トリンコマリー	ラージャバクサ	26.67%	UNP	46.36%	2
		シリセーナ	71.84%	TNA	25.44%	1
				UPFA	21.32%	1
北西部	クルネーガラ	ラージャバクサ	53.46%	UPFA	49.26%	8
		シリセーナ	45.76%	UNP	45.85%	7
	プッタラム	ラージャバクサ	48.97%	UNP	50.40%	5
		シリセーナ	50.04%	UPFA	42.83%	3
北中部	アヌラーダプラ	ラージャバクサ	53.59%	UPFA	48.35%	5
		シリセーナ	45.44%	UNP	44.82%	4
	ボロンナルワ	ラージャバクサ	41.27%	UNP	50.26%	3
		シリセーナ	57.80%	UPFA	43.63%	2
ウヴァ	バドゥッラ	ラージャバクサ	49.15%	UNP	54.76%	5
		シリセーナ	49.21%	UPFA	37.97%	3
	モナラーガラ	ラージャバクサ	61.45%	UPFA	52.53%	3
		シリセーナ	37.45%	UNP	41.97%	2
サバラガムワ	ラトナプラ	ラージャバクサ	55.74%	UPFA	51.19%	6
		シリセーナ	43.01%	UNP	44.94%	5
	ケーガッラ	ラージャバクサ	55.74%	UNP	49.52%	5
		シリセーナ	43.01%	UPFA	45.47%	4
全国		ラージャバクサ	47.58%	UNP	45.7	106 (93, 13)
		シリセーナ	51.28%	UPFA	42.4	95 (83, 12)
				TNA	4.6	16 (14, 2)
				JVP	4.9	6 (4, 2)
				SLMC	0.4	1 (1, 0)
				EPDP	0.3	1 (1, 0)

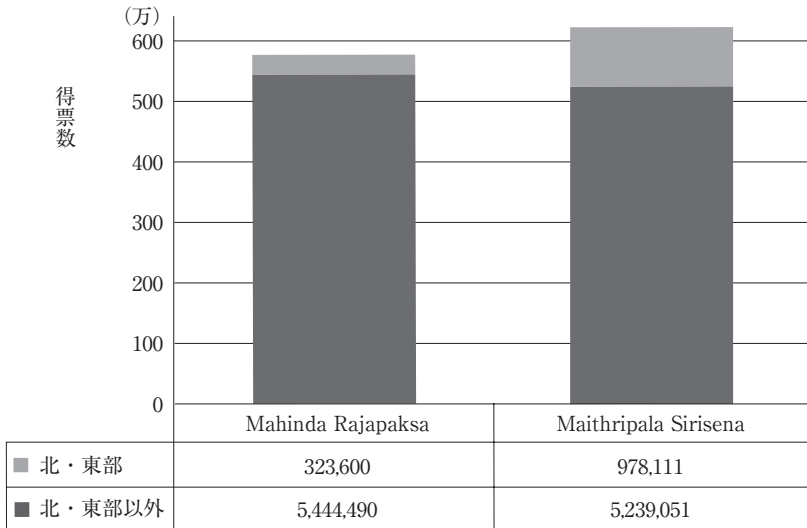
(出所) <http://www.slections.gov.lk/>

(注) 大統領選挙ではシリセーナが勝利した県、総選挙ではUNPが勝利した県を網かけした。

なかったようだ。

もうひとつのラージャパクサの敗因あるいはシリセーナの勝因は、都市部の有権者の動向である。図2-2は、2010年の選挙と2015年の大統領選挙の結果を示している。網掛け部分は、どちらの選挙でもラージャパクサが勝利した選挙区、白い部分は、ラージャパクサが2010年も2015年も負けた選挙区、そして、重要なのが斜線でしめす選挙区である。これは、2010年にはラージャパクサが過半数を獲得できたが、2015年には過半数に至らなかった選挙区である。コロomboの中心部は、ムスリムやタミルおよびUNP支持者が多いこと

図 2-1 2015年大統領選挙得票動向



(出所) Election Departmentより筆者作成。

から、2010 年も 2015 年もラージャパクサは過半数がとれていない（すなわち白い）。中心部から少し離れた選挙区は斜線で、2010 年にはラージャパクサが支持されていたのが、2015 年にはラージャパクサ不支持に移行しているのがわかる。もともと UNP 支持者は都市部に多いとされるが、じわじわと外に広がるように都市部でのラージャパクサ不支持が広がっていることが明確に読み取れる。

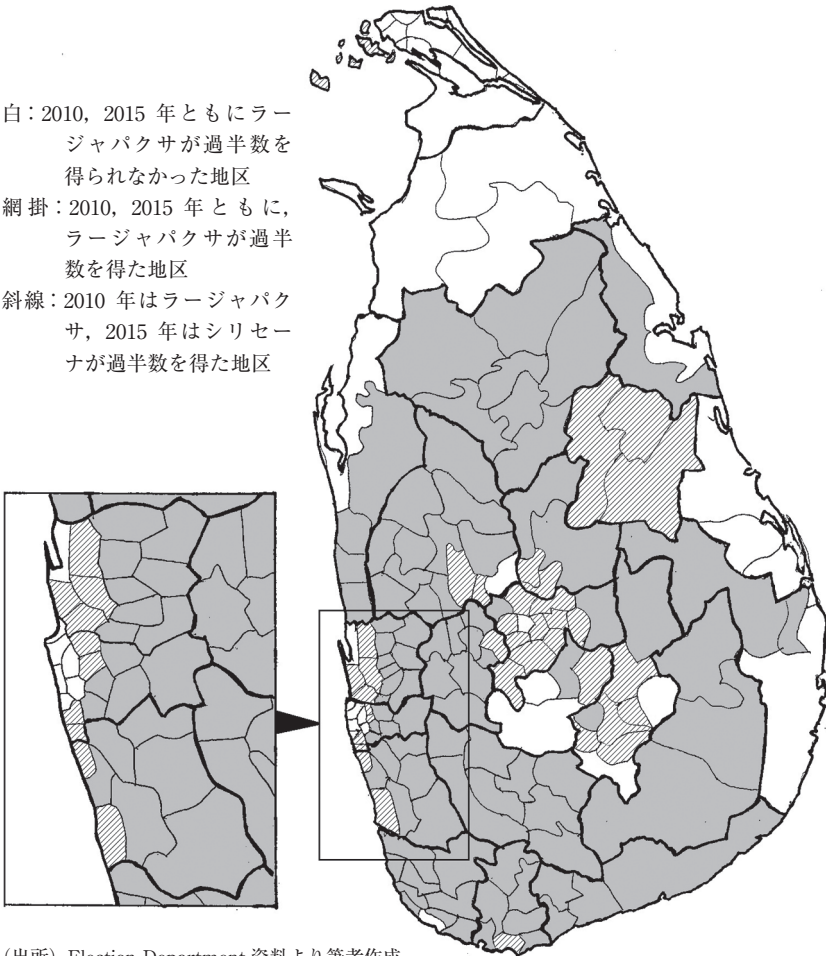
斜線の部分はほかにもあり、ポロンナルワ県は、シリセーナの出身地であることから 2015 年の選挙でラージャパクサは過半数を獲得できていない。キャンディ県周辺およびバドゥッラ県は UNP の支持者が多いことから、2015 年選挙で逆転が起きている（斜線が描かれている）と考えられる。

9. 選挙後のクーデタ未遂

投票の翌日 9 日の朝 6 時半、公式発表を待たずに敗北を悟ったラージャパクサは官邸（テンブルツリー）を去った。2010 年の大統領選挙でフォンセーカと

図2-2 2010年、2015年大統領選挙結果（地区別）

- 白：2010、2015年ともにラージャパクサが過半数を得られなかった地区
網掛：2010、2015年ともに、ラージャパクサが過半数を得た地区
斜線：2010年はラージャパクサ、2015年はシリセーナが過半数を得た地区



（出所）Election Department 資料より筆者作成。

フォンセカー一行を捕らえたラージャパクサとは思えない平和的な政権交代であった。まさかの平和的な政権交代であったが、投票後の深夜から早朝にかけてラージャパクサらによる、最後の抵抗、すなわち選挙結果を覆そうとする計画が立てられていたことが明らかになっている。

2015年1月11日にマンガラ・サマラウィーラが報道陣にラージャパクサと

ゴーターバヤ・ラージャパクサ国防次官によるクーデタ未遂があったこと、そしてそれがいかにして未然に阻止されたかを暴露し、阻止に貢献した人々に感謝している。サマラウィーラが明かした詳細は以下のとおりである⁽⁴⁶⁾。

開票が進むにつれて、ラージャパクサの敗色が濃くなっていった。官邸ではこのとき、ラージャパクサとゴーターバヤ国防次官、およびG.L.ピーリス (G.L. Peiris) 外相、最高裁長官モハン・ピーリス (Mohan Peiris)、西部州評議会議員ウダヤ・ガマンピラがいたとされる。

ラージャパクサとゴーターバヤは検事総長 (Attorney General) のユヴァンジャン・ウィジャティラケ (Yuvanjan Wijethilake)、軍司令官、警察長官 (IGP) を官邸に呼び出し、直ちに開票作業を止めさせる方法を確認した。しかし検事総長は、違法行為は極端に危険な影響を及ぼすと進言した。サマラウィーラによれば、ラージャパクサ政権は選挙運動期間中に軍や警察に運動に協力するよう圧力をかけていたが、軍や警察は独立して行動した。

また、軍司令官のダヤ・ラトナヤケ (Daya Ratnayake) 将軍も、国防大臣である大統領と国防次官の命令に「民主主義に反するようなことは何もしたくない」と、計画に賛同することはなく、クーデタは実現しなかったとされている。

このようなクーデタの計画だけでなく、実際に軍の一部を動員しようとする試みがあった。たとえば、投票前の1月はじめには、国防次官のゴーターバヤがコロomboで軍を配置しようとしていると暴露された。投票2日前にはジャガット・ジャヤスーリヤ (Jagath Jayasuriya) 陸軍将軍が署名した、北部部隊のコロombo駐留を命令する文書が暴露されている⁽⁴⁷⁾。

警察は不穏な動きを察知して、投票終了直後の1月8日午後4時の会見に引き続き、午後9時にも警察本部で異例の会見を開いている。会見では警察は独立を保つこと、投票所を保護する点を繰り返し述べた。午後7時の開票結果で早くもラージャパクサ敗北の可能性がみえていたからであった。

そして選挙後に新政権によって地位を回復したサラット・フォンセーカが後に明らかにしたところによれば、ラージャパクサは選挙の3日前から2000人の兵士を配置していた⁽⁴⁸⁾。もちろんこれは選挙法違反である。

クーデタ計画に賛同を得られなかったラージャパクサは9日午前4時半に自ら電話をかけ、ウィクレマシンハを呼び出し、公邸を無事に去ることなどについてウィクレマシンハから保証を得た後に、午前6時半には公邸を去った。

10日に予定されていた大統領の宣誓式は、急遽9日に独立広場で行われた。そして、本来ならば呼ばれるはずの最高裁長官のモハン・ピーリスは呼ばれず、代わりに最高裁判事のK. スリパヴァン（K. Sripavan）が呼ばれた。元軍司令官のサラット・フォンセカも盛大な歓迎に迎えられて、野党リーダーとともに宣誓式に参加した。

盤石と思われたラージャパクサの権威主義的体制はあっけなく崩壊した。野党や市民社会のなかにこの機会を逃すと後戻りができなくなるという強い危機感が生まれ、党の方針やこれまでの対立をこえて反ラージャパクサで一致したためであった。それほどラージャパクサとその一族支配の影響力は大きかった。

与党幹事長シリセーナの突然の離反とクマーラトゥング元大統領の政治復帰はラージャパクサにとって青天の霹靂であった。ラージャパクサ陣営は資金力と人員を総動員して大規模な選挙キャンペーンを展開した。一方、シリセーナ陣営はクリーンさを打ち出し、ラージャパクサ政権の腐敗・汚職を徹底して追及した。大統領選挙の結果は、北・東部州以外ではラージャパクサの得票は前回の大統領選挙と比べて減少幅は少なかったが、北・東部州の得票でシリセーナがラージャパクサに差をつけ、シリセーナが勝利した。

ラージャパクサが選挙運動開始前にティルパティ寺院に神頼みし、投票後はクーデタの実行を考えたのは、自身の保身のためだったろう。しかしそれだけではないと思われる。ラージャパクサは在任中、取り巻き、一族郎党に重要ポストをあてがったが、それが奪われることになると、彼らの生活を一変させ、恨まれることになる。だからこそ必死になって地位を守ろうとしたのだといわれている。

つまり、ラージャパクサだけが権力にしがみついていたのではなく、ラージャパクサに群がる人々もラージャパクサをなんとか権力の座にとどめておきたいと願った。大統領選挙でラージャパクサは落選したものの、彼がかつて振った権力の残像を追求めるグループは残った。それほどラージャパクサの権力は大きく、絶大だった。これらの勢力は、シリセーナ／ウィクレマシンハ政権発足後もラージャパクサを復活させようと活動を開始する。

【注】

- (1) *Daily FT*, 2014年12月2日付け, “Common Cry!” <http://www.ft.lk/2014/12/02/>

common-cry/

- (2) *The Hindu*, 2015 年 1 月 22 日 付 け, “Sri Lankas’ Rainbow Revolution” (サ マ ラ ウ ィ ー ラ の 寄 稿 記 事) <http://www.thehindu.com/opinion/op-ed/sri-lankas-rainbow-revolution/article6808918.ece>
- (3) 改正前はバドゥッラ県 2 万 9043 人, モナラガラ県 3 万 251 人とバランスがとれていた。
- (4) *The Sundaytimes*, 2014 年 8 月 31 日 付 け, “Flouting of Election Laws, Abuse of State Property, Violence Hold Sway” <http://www.sundaytimes.lk/140831/news/flouting-of-election-laws-abuse-of-state-property-violence-hold-sway-115853.html>
- (5) ハリン・フェルナンドは最大の選好票を獲得したが, UNP の獲得票数が少なかったの
で, 主席大臣には選出されなかった。
- (6) <http://www.dailymirror.lk/52863/victory-with-a-red-light>
- (7) ラージヤパクサの主張では, 2010 年 1 月の大統領選挙で国民から 6 年間という信託
を得て大統領に就任した。2015 年の選挙に勝利したならば, 任期は 2 期目の残りの任
期の 2 年と 3 期目の任期の 6 年を足した 8 年となる。
- (8) *Daily FT*, 2015 年 8 月 10 日 付 け, “Born SLFP, will die SLFP: Chandrika
Kumaratunga” [http://www.ft.lk/article/456165/Born-SLFP--will-die-SLFP--
Chandrika-Kumaratunga](http://www.ft.lk/article/456165/Born-SLFP--will-die-SLFP--Chandrika-Kumaratunga)
- (9) [http://www.dailymirror.lk/56469/no-intention-to-be-opposition-s-common-candidate-
maithripala#sthash.jNPAACo4.dpuf](http://www.dailymirror.lk/56469/no-intention-to-be-opposition-s-common-candidate-maithripala#sthash.jNPAACo4.dpuf)
- (10) <http://www.dailymirror.lk/56849/ndicate-maithripala-asked#sthash.o3cifgMx.dpuf>
- (11) <http://www.dailymirror.lk/57095/unp-names-maithripla-as-the-common-candidate>
- (12) <http://www.dailymirror.lk/57095/unp-names-maithripla-as-the-common-candidate>
- (13) アジット・マンナベルマ (Ajith Mannaperuma) の発言, だから保健・衛生行政は
滞っていると批判。
- (14) [https://www.colombotelegraph.com/index.php/i-have-files-on-all-those-who-defected-
mahinda/](https://www.colombotelegraph.com/index.php/i-have-files-on-all-those-who-defected-mahinda/)
- (15) <http://www.dailymirror.lk/57447/we-have-plundered-enough-amaraweera>
- (16) <http://dbsjeyaraj.com/dbsj/archives/35813>
- (17) <http://tamilnation.co/tamileelam/democracy/070214mangala.htm>
- (18) <http://dbsjeyaraj.com/dbsj/archives/36275>
- (19) *Daily FT*, 2014 年 12 月 9 日 付 け, “Hirunika for Maithri” [http://www.ft.lk/2014/
12/09/hirunika-for-maithri/](http://www.ft.lk/2014/12/09/hirunika-for-maithri/)
- (20) *Daily FT*, 2014 年 12 月 2 日 付 け, “Common Cry!” [http://www.ft.lk/2014/12/02/
common-cry/](http://www.ft.lk/2014/12/02/common-cry/)
- (21) ウィクレマシンハ, クマーラトゥンガ, フォンセーカ, 民主党, ソービタ師, マ
ノー・ガネーシャン (Mano Ganeshan) の民主人民戦線, アサード・サーリ (Azad

- Sally) のムスリム・タミル国民連合, LSSP (Lanka Sama Samaja Party) の一部 (本体はUPFA構成メンバー)。市民団体としては自由メディア運動 (Free Media Movement), 大学教員連盟 (Federation of University Teachers Association: FUTA) など。
- (22) JHU所属の仏僧ラタナ師など。僧侶が議員として政治参加する場合, シンハラ至上主義的な傾向がある。
- (23) <http://www.dailymirror.lk/58347/jvp-people-not-naive#sthash.hcBHYcZv.dpuf>
- (24) 同製品の価格は9月にも250ルピー引き下げられた。
- (25) *The Hindu*, 2014年12月25日付け, “BJP’s Social Media Expert Logs in for Rajapaksa” <http://www.thehindu.com/news/international/south-asia/bjps-social-media-expert-logs-in-for-rajapaksa/article6725507.ece>
- (26) <http://www.dailymirror.lk/57161/video-mr-in-big-trouble-now-maithripala#sthash.nAyM6o7S.dpuf>
- (27) <http://www.dailymirror.lk/58975/will-not-allow-cronies-to-flee-maithri#sthash.hxfi20P6.dpuf>
- (28) <http://dbsjeyaraj.com/dbsj/archives/35932>
- (29) これらの数字は歪曲されているとする意見もある。たとえば*The Island* “Gout. Corraption & Mega Deals” http://www.island.lk/index.php?page_cat=article-details&page=article-details&code_title=116362 参照。
- (30) <http://www.dailymirror.lk/59031/colombo-port-city-will-be-scraped-ranil#sthash.9JelWTaV.dpuf>
- (31) 汚職や権力の濫用に対しては法的な措置が執られるべきであると, 野党リーダーたちは反対した。
- (32) 息子で中央州評議会議員, Chinthana Ekanayakeはラージャパクサ支持。
- (33) Verite research, 2015 “presidential Election of 2015 A reading from the uva province Eelction 20142
- (34) *The Sunday times*, 2014年12月21日付け, “Rifts within both alliances as campaigning hots up” <http://www.sundaytimes.lk/141221/columns/rifts-within-both-alliances-as-campaigning-hots-up-128221.html>
- (35) <http://www.dailymirror.lk/60015/video-i-ll-get-more-votes-from-north-at-this-election-mr#sthash.P7dbbLgg.dpuf>
- (36) <http://www.dailymirror.lk/60061/salman-gets-rs-700million-for-amusement-maithiri#sthash.wfUr5OiV.dpuf>
- (37) <https://www.ceylontoday.lk/31-81672-news-detail-polls-chief-issues-ultimatum-to-media.html>
- (38) <http://www.dailymirror.lk/60697/ec-visits-rupavahini-compels-correction-of-news-item#sthash.g5ErQeSV.dpuf>

- (39) <http://www.dailymirror.lk/59175/jhu-says-g-pila-harassing-them#sthash.ig0rtdzU.dpuf>
- (40) *Daily FT*, 2014年12月4日付け, “Transparency Intl. Sri Lanka Exposes Pre-Presidential Poll Violations” <http://www.ft.lk/2014/12/04/transparency-intl-sri-lanka-exposes-pre-presidential-poll-violations/>
- (41) *Daily FT*, 2014年12月17日付け, “TISL Writes to Transport Secy Over Misuse of SLTB Bus for Polls Work” <http://www.ft.lk/2014/12/17/tisl-writes-to-transport-secy-over-misuse-of-sltb-buses-for-polls-work/>
- (42) 愛国国民戦線から出馬したR.A. シリセーナは、シリセーナ、ラージャパクサに次ぐ第3位の得票（1万8174票）を獲得した。
- (43) ラージャパクサとその息子ナマル（Namal）はツイッターを駆使して、ラージャパクサー族がスリランカ人に好ましいとされる振る舞いをしていると発信していた。
- (44) フォンセーカら一行が滞在するトランス・アジア・ホテルを軍や警察が取り囲み、騒然となった。
- (45) *The Hindu*, 2015年1月2日付け, “Vote for Known Devil, Rajapaksa Urges Tamils” <http://www.thehindu.com/news/international/south-asia/rajapaksa-to-tamils-known-devil-is-better-than-unknown-angel/article6748743.ece>
- (46) <http://www.dailymirror.lk/60955/unp-upfa-trying-to-destabilise#sthash.Ps08YTtj.dpuf>
- (47) *Daily FT*, 2015年1月17日付け, “When Democracy Stood upon a Razor’s Edge” <http://www.ft.lk/article/382459/When-democracy-stood-upon-a-razor-s-edge>
- (48) <http://www.ndtv.com/world-news/2000-soldiers-were-moved-to-colombo-for-coup-says-former-sri-lankan-army-chief-728507>